

言語と女性差別

情 97-226 鈴木 洋平

指導教員 加藤雅人

人類は、男と女という、二つの性から成り立っている。男と女は、生物として子孫を残していく上でも、人生を生きていく上でも、お互いに必要不可欠な存在である。たった二つの性、男と女、だからこそ、人は愛し合い、自分には無いものを求め、安らぎを感じるのである。しかし、対称的な性質を持っている二つのものの一方が、他方よりも劣っていると解釈された場合、そこに、区別、あるいは差別が生じるのである。この世の中には様々な差別が存在するが、その中の一つとして、女性差別が存在する。

私は、日々の生活の中で、「女だから...」「女のくせに...」「しょせんは女」等の言葉に特に意識がいくようになり、なぜ女性ばかりがそのような言い方をされるのだろうか、と、すごく疑問に思うようになった。しかし、そのように思う私でも、何か物事をするにあたって、「女性には負けられない」と思うことがある。男のプライドというもののなかのどうかはわからないが、自然とそう思ってしまう。それは、今まで生きてきた中で、そのような考え方を知らず知らずのうちに獲得してきたからではないかと考えるようになった。そして、女性差別というものに興味を抱くようになった。

この、社会に根強く浸透している女性差別が、人類の最大の発明とも言われている言語に反映されていないわけがない。人類が発展していく上で、その中心にいたのはこれまで常に男性であったから、言葉が変わっていく時にも、男性のものの見方、考え方が影響されているはずである。この論文では、「言語と女性」にスポットを当てて、実際にどのような女性差別語が存在し、それをなくしていくにはどうすればいいかについて考えたいと思う。

まず、第一章では、我が国の歴史において、女性は社会の中で、どのような地位、役割を期待され、実際にどのような言葉を使ってきたのか、そしてそれは、時代とともに、どのように変化してきたのかについて見ていく。古代の日本語には特に性差は見られなかった。平仮名が成立し、これを専ら女性が使った。この時代、中国の儒教思想の浸透により、男尊女卑の観念が根づき始めた。中世の言葉にも、性差は見られなかった。当時、仏教思想が定着し、女性は罪深い性、男性に劣った性とされた。この時代から、家父長制度のもと、女性の男性への従属が始まった。ところで、宮中で働く女性たちの間で、女房詞が生まれ、上品な言葉のサンプルとして一般社会に広まった。近世に入ると、家父長制がますます強まる。女性の生き方、言葉づかいを示した多くの教訓書が出され、女子教育のよりどころとされた。またこの時代、遊女詞が生まれた。近代の世の中では、話し言葉に性差が確立した。国家は、良妻賢母主義を推進し、女性は他人のために貢献すべきであると教育された。昭和になると、女性は、ヤマトナデシコとして、美しく上品で、淑やかな言葉を求められた。しかし、敗戦と、女性解放をきっかけに、言葉の制約が取り除かれ、女性語と男性語の距離は縮まっていった。しかし、「夫は仕事、妻は家庭」を前提とした女性差別はいまだ存在するのである。

第二章では、マスメディアの中でも、最も公平な目で語れるべき新聞の中で、どのような女性差別が行われているのか、そして、なぜそのようなことが起こるのかについて述べる。第一に、新聞の中の表現には、その人が女性であることを強調する表現がある。「女子高生」など、職業名の上に女性冠詞を乗せたものや、女性であることが職業名そのもの

に示されている「看護婦」「嫁」、さらに、「スタイルが気になる年ごろの女の子」といった、女性の固定観念に基づく表現。これらは、人間＝男性という想念や、男女の主従関係という暗黙の決まりごとがあるため、女性であることを強調される。第二に、家族を代表する人は男性であり、家族関連の記事では、女性は必ず、「...さんの妻」という形で書かれる。第三に、女性は、男性と異なるものさしではかって描写される。女性の業績や手腕はストレートに語られず、容貌やプライベートな事柄が不必要に書かれたり、女性は「さん」やファーストネームで呼ばれる。第四に、女性は男性の付属物として扱われる。これも、「人間＝男性」という想念に基づいている。第五に、ある事象の原因が、個人にではなく、あたかも女性であることに由来するかのごとく書かれることがある。そして、社説では、男性優位主義を批判し性差別意識の変革を訴える割に、報道記事の中では、上記のような女性差別表現を平気で使ったり、性差別の問題など、女性にとって重要な話題を家庭面で扱い、無関心な話題にする。このような女性差別の原因は、情報の送り手がほとんど男性であることに由来する。そして、性差別の問題が、男性優位の文化そのものに根ざしている限り、私達の文化を問い直す必要がある。

第三章では、私達の実際の会話の中で、男性、女性のそれぞれが、どのような話し方をし、それがお互いにどのような影響を与えるのかについて考えたい。女性は、女性だけのグループで話をする場合、互いの感情や関係を話題にしやすい。また、互いの順番を尊重し、全ての人が会話に参加するように配慮する傾向にある。それに対して、男性は、プライベートなことにはあまり触れず、時事問題、旅行、スポーツなど、自分の方がよく知っているということを示そうと競い合い、話題が変わりやすい。また、話の支配権を競い、会話を支配する者と聞き役にまわる者とに分かれる傾向にある。つまり、女性は、相手の話に興味を持ち、それを支持しようとして、会話の進行それ自体に気を配るのに対し、男性は、自分の関心事に対してのみ興味を示し、興味がなければ話題の転換を求める。このような男女の話し方の違いは、特に意識されることもなく、差別的事実気づかないで会話が行われることが多い。

第四章では、「男性＝人間一般」という想念（これは、言語とジェンダーの問題では基本的な考え方ではあるが）について解説し、女性というジェンダーが、言語の中でどのように表現されているかについて見ていく。まず、第二章でも少し触れたが、「男性＝人間一般」という想念について考える。英語の he/man という単語は、文脈によっては、「人間」の意味に用いられることがある。このように、男性形容詞が女性形容詞を包括することで、男が人間の基準、女は基準から外れた存在であるかのように解釈される。日本語でも、「ばくち」「きょうだい」などの表現が、男女の両方を指すことから、同様のことが言える。この考え方によって、実際に、「運転手」や「若者」という単語から、その人が男性であると連想される。次に、女性を指す言葉について見ていく。これは、英語であれ日本語であれ、否定的意味合いを持つ。特に性的な意味、つまり、性の対象物や売春婦の意味であることが多い。これは、女性を「性の対象物」としてしか捉えてないことを示す。

以上に見てきた言語における女性差別をなくそうとした時、それは、言葉だけの問題では終わらない。差別的な意味組織や社会の構造、その構造の中で築かれる人間関係の歪み等の言語における性差の背後にあるものをとらえるために、言語と性差研究は、言語が埋め込まれている文化の幅広い領域を視野に収めるものでなければならない。そして、女性達の間言語の性差別性についての気づきがあるとすれば、それに明確な表現を与え、言語の性差と社会の性差別との関係を理論化していく作業、文化・言語に組み込まれた目に見えない性差別を解体していく作業が必要であろう。